
世界はみんなちょっとだけ不幸

寂しんボーイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世界はみんなちよつとだけ不幸

【Nコード】

N9817H

【作者名】

寂しんボーイ

【あらすじ】

彼女からの突然の別れの言葉、それによつて物語は終わり、始まった。おかしい友人達との普通な生活、普通の生活によつて生まれたおかしな絆。冴えない主人公・杉山知之すぎやまともゆきの冴えなくも平穏な日常はこうして始まった。

ブローグ

9月11日の夜、僕は彼女に振られた。

メールに「ちよつと話がしたい、大学の正門まで来て」なんて機械的な文が踊つてた時点で嫌な予感があったが、まさか別れ話だったとは……。

メールに指定された場所いくと、彼女は泣きながら、駆け寄ってきてすぐに暴雨風のような勢いで僕に別れ話を切り出してきた。突然のことに困惑していた僕は彼女の言っていることの3分の1も理解できなかったが、要約すると次のような内容のものだった。

「あんたよりイケメンで、車持つてて、優しい人が告白してきたから、ユーと別れたいでござる！！別れたいでござる！！」

納得。全くもって一部の間もない。彼女は弁護士にでもなった方がいいんじゃないだろうか？最後には熨斗でもつけるように「別れてもずっと親友だよ」って言うてきたとこなんてありがたくて涙が出そうだ、もう花丸あげちゃう♪

僕はただ首を縦に振るだけしかなかった。

それから3時間後、すでに彼女がスキップしながら去った正門に、僕はいまだ電柱のように立っていた。いや、この表現は電柱に失礼だろう。今の僕のカースト身分は牛乳を拭いて3日後の雑巾並なのだから……。

「あんな奴そんなにスキじゃなかったよ、バーカ！」

うん、ゴメン。今すんごい嘘ついた。もし僕が人間になりたい木製人形だったら、鼻が伸びて後頭部に直撃するレベルの嘘ついた。

超スキ！！大好き！！

「あいつの代わりなんていくらでもいるし……。いい機会だよ、これは」

なにこの嘘、ひどすぎる。もう見てらん無い！いつ殺されても文句言えないよ、これは！

大体、お前の携帯の登録件数24件じゃん！その中で女性の番号なんて母親と、つい3時間前まで彼女だった、『元』彼女だけじゃん。ない袖をどうやってたら振れるんだよ！お前ノースリーブじゃん！もう肩まで袖ないじゃん！

あんまりふざけた事ばかり言っているとマジ泣かすよ？杉山知行くん♪

あつ、そういえば自己紹介忘れていた。

僕の名前は杉山知之（すぎやまともゆき）。田舎の中堅大学に通う21歳。

中肉中背で顔に特徴は無し。いや、右目の泣きホクロがチャームポイントだろうか？

今のは自分で言ってるんだが想像以上に腹が立った。ごめん、今の無しで！

サークルはバレーボール部でリベロの補欠の補欠。大体なんで身長が170cmそこそしかないのにバレー部入ってるんだよ！ほんと馬鹿じゃねーの……。女の子目当てで入部して結果この様かよ、ほんと我ながらおめでたいね。

なんか自分で言ってる涙出てくるんだけど、もう人様に言えるようなプロフィールはないんだ。期待した人ゴメンね。

あ、大切な事を言い忘れてた。

杉本知之、彼女イナイ歴三時間。問答無用の出来立てはやほやのルーザードッグ。これが今の僕を表す最大で最適な自己紹介。

「まあ、どうあれ彼女には幸せに——」
グー。

グー？パー。僕の勝ち♪なんて言ってる場合じゃないな……どうやらこのだらしなくて、空気の読めない水差しは野郎は僕の腹の音。人

問ってやつはどんなに悲しくてお腹は空くんだな。

「腹減った……もう帰ろうかな」

自分で口にしておきながらちよつと吹き出しそうになった。せつかく3時間も馬鹿みたいに、悩んで、悩んで考えた言い訳、それはきつと小説や映画、ドラマに漫画色んな場所で嫌ってほど使い倒された雑巾のようなボロボロな言い訳。

それでも、その時の僕にはその言葉がとっても魅力的に思えたんだ……。きつとその言葉を口にすれば諦められる、小説の主人公達のように悲劇のヒーローになれる。きつと彼女のこと諦められるそう思ったのに……。

よりにもよって出た台詞が「腹減った」なんて。自分の決まらなさと、その言葉があまりに僕にお似合いで、泣けてくる。いや実際に僕は泣いていたんじゃないだろうか？

僕は、泣いた。

声を出して泣いた。

理由？彼女の一方的な別れに対する怒り。大好きな人に振られた悲しさ。彼女を引き止めることが出来なかった自分の不甲斐なさ。

その全部が正解で全部が不正解。

きつと僕は泣きたいから泣いたんだと思う。泣く理由なんてそれで充分だろ？

結局、それから僕は20分以上もそこで泣いた。きつと警備員もさぞかし居心地が悪かっただろう。本当に申し訳ない、犬に噛まれたと思つて諦めてほしい。

泣いて、何が解決したわけじゃない、いやそもそもこれは解決できるような類の話でもない。もうとつくに終わってしまったラブストーリー。

それでも……まだまだ整理できてない、散らかり放題の感情だ

けど、それは僕に「もう歩きたい」と言ってくれた。だから僕もこの口にしよう。

「コンビニで何か買って帰ろう」

誰に聞かせるでもない、その酷く説明的な独り言は静かな夜に一瞬響き、そして虚空に消えていった。それを合図に僕も田舎のせい、街灯もやっている店も少ない、夜の真っ暗な大学通りに歩き出し、一度だけ振り返り、そして消えていった。

現在の時刻は22時37分。まだまだ僕の長い夜はこれからのもうだ。

第一話：夜道は続くよ、どこまでも

カチャ。コンビニは正門から歩いて、10分のところにある。

カチャ。世間一般の感覚でいえば不便と感じるんだろうが、この田舎でもう3年近く暮らしている僕に言わせれば全く問題ない。

カチャ。何せ24時間スーパーに行くとなると、ここからさらに40分近く歩かなければならないのだから、それに比べれば便利で便利ではない。

カチャ。実家からここに来てすぐの時は畑だらけのこの場所に少しびっくりしたが、それでも少しも不便とは感じなかった。きつと一人暮らしの嬉しさで麻痺してたんだろうな。

カチャ。彼女と付き合いだしてからもこの道は何度も通った、もうその時には一人暮らしの興奮からも醒めていたが、彼女と手を繋いで歩いたこの道は幸せな記憶でいっぱい。

カチャ。だから初めてじゃないだろうか？こんな憂鬱な気持ちでこの道を通るのは。

カチャ。天気が今日の出来事を見透かしたかのように、昨日まで温暖だった気候は一変して、風が吹きすさぶ秋の表情になっていた。

「もう9月だったよな・・・通りで寒いわけだよ。夜はもう上着がいるな」

カチャ。これも独り言。誰に聞かすでもない空虚な言葉の羅列。まあどんなに飾った言葉で言おうと今の僕は完全に危ない奴ってこと。ホント親兄弟には見せられない姿だな、こりゃ。

大体、僕が今日薄着の理由なんて自分で一番良く知っている。今日は本当は彼女と食事に行く日だったんだ。そして彼女は寒がりでも僕も僕の腕に自分の腕を絡ませてきた。

だから秋の寒空でも僕は薄着で寒くない。いや寒くなかった。寒くないはずだった。つまりそういう訳、おわかり？カチャカチャ。

「さつきからなんだよ！！カチャカチャカチャカチャうるさいな！マジKYだよ！」

八つ当たりだった、完全に。自分がイライラしてるからって、他人を怒鳴るなんてホント最悪だ。すぐに謝らなくちゃ。

そう思いすぐに音のする方に視線を向けると「カチャ。

カチャ。カチャカチャ。カチャカチャカチャ。その耳障りな音を出していたのは、あるべき場所を失い、不甲斐ない主を蔑むかのようにせわしなく動く右手。その手の先には2年間の激務に耐えボロボロになってしまった携帯。液晶に写るのは「新着メール無し」「新着メール無し」「新着メール無し」「新着メール無し」

「僕って奴はつくづく度し難い男だな・・・こうして携帯を弄ってれば彼女がメールをくれるって？」「さつきのは嘘だから、早く食事に行こうよ」って送ってくるか？はっ！馬鹿じゃないのか？」

んなわけないだろ？彼女は今、新しい『彼氏』の家で食事を食べてるんだ。夢見たいな事言ってる暇があったら、さつきとコンビニに行けよ、僕。

真夜中のコンビニ。そこは僕ら学生にとって想像以上に魅力的な場所。

夜食、立ち読み、ツマミの補充理由なんてホント些細なものなんだろうけど、酒とセックスあとはカラオケぐらいしか娯楽のないこの辺では、深夜に煌々と輝くその照明によって引き寄せられる蛾のように、僕達はここに魅了される。

「うわぁ……」

入り口に設置された殺虫機によって殺された、大量の蛾・羽虫を見て思わず声が漏れてしまった。食事前に見るもんじゃなかった…。僕はその死骸を横目にさつきとに自動ドアへ急いだ。

店内には薄っすらエアコンが効いていたが、外よりは幾分温かい、

きつと明るすぎる照明と、もう日が変わろうというのに帰る気配が無い客のせいだろう。僕もやつと人心地ついた。やはりどこかで人寂しいと思っていたんだろうか？

「うーん、チーカマ嫌いなんだよな・・・僕。から揚げはーちえ、無いかあ」

店内で今日のダイナーの物色。コンビニのお惣菜はどうしてこう心躍るのだろうか？

おっ！？新作ポテチも出てる♪

もちろん購入。ポテチにお金を惜しむ男は出世できない。これは僕の自説であり座右の銘だ。真偽？僕を見れば分かるでしょ……。

こうして僕は満足な食料調達を行った。これだけあれば、おかずにもツマミにも充分だろう。そうそうついでに雑誌も3冊、これだけあればオカズ充分だろう。

僕はさっきまでの憂鬱を忘れ、有頂天だった、気分は絶好調！！秋の季節は変わりやすい、そして男女平等が叫ばれる近年では振られ男の気分も変わりやすいようだ。

夜はまだまだふけていく……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9817h/>

世界はみんなちょっとだけ不幸

2010年11月10日15時04分発行